

## 追悼

## 名誉会員 菅野三郎先生を悼む

天野和孝



本会の名誉会員である菅野三郎先生は、平成20年2月17日に永眠されました。享年91歳でした。いうまでもなく先生は日本の新生代軟体動物化石研究の第一人者というべき方でした。

先生は大正5年に福島県にお生まれになり、福島師範学校から東京高等師範学校、東京文理科大学に進学されました。福島師範学校ご卒業後に小学校の、東京文理科大学ご卒業後に東京高等師範学校附属中学校・高等学校の教諭を経験されています。晩年、「小学校から高校教員の経験が色々な面で役に立った」と話されており、菅野先生の授業は大変分かりやすいという定評がありました。東京教育大学名誉教授 故藤本治義先生のお招きにより昭和25年に東京高等師範学校にご奉職されましたが、その直後、死の病といわれた結核に冒され、片肺を切除するという大手術を受けられました。奇跡的に回復された後、大学改組にもなって昭和27年に東京教育大学理学部地学科に移られました。

昭和49年には東京教育大学の移転にもなって新設された筑波大学地球科学系の教授となられ、地球科学系系長や筑波大学大学院博士課程長などのご要職を歴任されました。昭和55年に筑波大学をご退官後、ただちに新設された上越教育大学学校教育学部へ赴任され、新大学の創設期に地学教室の設立など多大な貢献をされておられます。昭和61年に上越教育大学を定年退官されるまで、多

数の優秀な地質学研究者、地質技術者、教職者を育て上げられました。

先生のご研究のテーマは時代ごとに変化し、グローバル化していきました。当初のご研究はご郷里の近くの宮城県金山町（現丸森町）や埼玉県の小川盆地や秩父盆地の化石や層序に関するものでした。特に、秩父盆地の軟体動物化石を精力的に研究され、当時東京教育大学教授を兼任されていた東北大学名誉教授 故畑井小虎先生のご指導のもと学位論文としてまとめられました。その成果である昭和35年の大著“The Tertiary System of the Chichibu Basin, Saitama Prefecture, Central Japan. Part II. Paleontology”は48年の歳月を経た現在でも色あせることはありません。特に、詳細な化石記載にもとづいて、古環境の復元を行うなど当時としては画期的でした。また、*Mizuhopecten chichibuensis*の成員に足糸櫛歯を持つ個体を認めるなどホタテガイ類の進化を考える上で、重要な発見もされています。

その後、東京教育大学名誉教授 故橋本亘先生とともに、北海道の軟体動物化石の研究を推進されました。なかでも、“築別動物群”として一括されていた動物群が三毛別動物群と築別動物群からなることを明らかにしたことや、紅葉山動物群と滝の上動物群を記載し、その特徴を明らかにされたことが特筆されます。また、滝の上層から温暖種の *Vicaryella teshimae* を発見されたことは、中新世の古生物地理の復元に大きな影響を与えました。さらに、滝の上層から産出したシロウリガイ類 *Adulomya chitanii* を記載した際に、この種が主歯を持つことを初めて明らかにし、従来キヌタレガイ科とされてきた本属をオトヒメハマグリ科に移す契機となりました。このことは故波部忠重先生が著された「日本産軟体動物学」にも影響を与えています。また、北海道に関する一連の研究成果は、地理的に近いロシア連邦の軟体動物化石研究にとって重要であり、今でもたびたび引用されています。

著者が学生時代に菅野先生から伺った北海道の調査のお話で印象に残っているのは、中川町で熊に出会われたことや幌加内町から羽幌町にかけての調査で野宿したお話もさることながら、幌内層の不思議な石灰岩のお話です。深海で堆積した幌内層の泥岩の中に *Hubertschenckia* という二枚貝が合弁で密集した石灰岩の岩体があったところにあるがその理由が分からないというのです。今にして思えば、まさしく化学合成群集の産状なのですが、当時から着目されていた先生のご慧眼に敬意を表します。

昭和43年にはアメリカ合衆国地質調査所カリフォルニア支所に文部省在外研究員として1年間滞在され、Warren O. Addicott 博士とともにアラスカの軟体動物化石の研究を精力的に行われました。Yakataga 地域を調査された時には、当初移動の困難が予想されたが、たまたま居合わせた石油会社の方に化石の鑑定を依頼され、その見返としてヘリコプターを使わせてもらって効率的な調査ができたと同いました。この時の成果は昭和46年に日本古生物学会特別号第16号“Tertiary molluscan fauna

from the Yakataga District and adjacent areas of southern Alaska”として発表されています。

その後、先生のご関心は環太平洋全域の軟体動物化石に広がり、台湾、フィリピンを中心にマレーシア、インドネシアに及ぶ東南アジアの第三紀の軟体動物を研究されました。台湾では、軟体動物を用いて年代論を再検討され、従来漠然と古第三系とされていた台湾北部の脊梁山脈の地層が、漸新世～中新世前期に堆積したことを明らかにされ、台湾の地史を復元する上で貢献されました。また、産出する *Amussiopecten* に着目されてその起源と移動を考察されています。一方、フィリピンでは、*Vicarya* に着目され、中新世前期と後期の地層から多く産出することを明らかにされました。

こうした研究成果を環太平洋地域の研究者で共有し、発展させるため、昭和 53 年には Symposium of Geology and Paleontology of Southeast Asia を企画・開催されました。また、International Congress on Pacific Neogene Stratigraphy に積極的に参加され、第 2 回となる昭和 54 年のソビエト連邦（現ロシア）のハバロフスク会議では、先生に軟体動物化石についてのアドバイスを求めるロシア人が引きも切らなかつたと伺っています。

昭和 55 年の筑波大学ご退官に際しては、国内外から多くの玉稿が寄せられ、534 ページにも及ぶ大冊 “Professor Saburo Kanno Memorial Volume” が出版されました。先生はこの冊子の出版を大変喜ばれ、ご病床にもこの冊子が置かれてありました。

上越教育大学に移られてからも、東南アジアや *Vicarya* の研究を続けられ、大学の創設期でご多忙中の折にもフィリピンの調査を継続されました。昭和 56 年は大雪の年で、フィリピンから帰ってきたら、雪のために入り口がふさがれて、官舎に入れなかつたともお聞きしています。こうした調査の成果の一つが従来鮮新世とされてきたルソン島における Tartaro 層産軟体動物化石群のモノグラフです。また、この動物群の年代が中新世後期であることも明らかにされています。昭和 61 年には *Vicarya* の分類について総括し、上越教育大学の研究紀要第 5 巻に “Revision of genus *Vicarya* (Gastropoda) from the Indo-Pacific Region” を発表されました。この中で、東南アジアおよび日本の中新世の *Vicarya* をそれぞれ *V. verneuli* と *V. yokoyamai* の 2 種にまとめられています。さらに、日本の始新世の *Vicarya* は *Vicaryella* に含まれることも指摘されました。

一方、上越教育大学周辺の軟体動物化石の研究も積極的に進められ、上越地域の軟体動物相が次第に明らかにされていきました。とりわけ、上越地域から産出するシロウリガイ類に興味を持たれ、冷湧水群集が上越地域に存在したことを示唆されました。

上越教育大学をご退官後は、依頼されて日本相撲協会相撲教習所などの講師を勤められましたが、常勤職には就かれず、研究生活を楽んでいるご様子でした。とりわけ、*Vicarya* とシロウリガイ類に興味を持たれ、昭和 63 年には

北海道南西部の中新統訓縫層から *Vicarya* とその随伴種を記載されました。この結果、奥尻島までの分布とされてきた *Vicarya* の北限が長万部周辺まで北上したことになります。

一方、化学合成群集の特徴的なタクサであるシロウリガイ類の研究も進められ、神奈川県池子層の標本をはじめ、各地のシロウリガイ類について検討されました。特に、これまでの研究が外形のみに頼っていることに疑問を抱かれ、二枚貝の分類にとって重要な主歯の形態を明らかにすることに努められました。その成果の一つに、*Adulomya* 属の模式種である *A. uchimuraensis* の内部構造を初めて明らかにされたことが挙げられます。また、当時の忘れられない思い出は、先生が新潟県松代町の町史の編集長をされた時のことです。著者も執筆委員でしたので、町史も完成し、出版祝賀会に出席しました。無事に終わって、外に出てみますと、会場の入り口に無造作に大きな石灰質団塊が置かれています。表面を見るとなんとシロウリガイ類が密集しているではありませんか、酔いもすっかりさめて、慌てて先生を呼びにいきました。先生もご覧になって、シロウリガイ類と確認され、大変喜ばれましたが、時すでに遅し、シロウリガイ類の記述のないまま町史は発刊された後でした。

先生が常日頃おっしゃられていたことは、古生物の研究分野や方法論は日進月歩である。しかし、その基本となるのは必要な形質の検討にもとづく分類であり、これを誤ってしまうと、あとは絵空事であるということでした。例えば、シロウリガイ類の多くは合弁で産出し、内部構造を検討するのは非常に困難ですが、二枚貝ではこれを検討しなくては同定ができないという信念を持っておられたように思います。その証拠に先生の二枚貝の図版を見ますと、必ず内部構造が図示されています。

また、先生は太平洋戦争や新設大学の立ち上げに二度携わられるなど激動の時代を生きてこられました。そうした体験や長年にわたる各校種の教員としてのご経験から、教育にかける情熱は人一倍であったと思います。ほめて育てることがありますが、著者が研究で悩んでいる時などには本当に救いでした。反面で厳格なところもあり、正当な理由がなく先生の授業に遅れてしまった学生には厳しく叱責されました。それ以降、学生たちは他の約束事にも時間厳守で臨むように努力しましたので教育効果が大きかったように思います。

こうした先生のお人柄やご業績から、11 種の軟体動物化石や棘皮動物化石の新種に先生のお名前が付けられております。また、昭和 47 年にはこれまでのご業績が高く評価され、日本古生物学会学術賞を受賞されました。さらに、平成 4 年には勲三等旭日中綬章を授与されておられます。入院直前まで研究を続けられておられたご様子で、ご自宅の机には多くの化石標本が残されておりました。生涯を通じて良き研究者であり、良き教育者であった先生のご冥福を謹んでお祈りしたいと思います。